

書評：梶本卓也・大丸裕武・杉田久志編著. 2002. 雪山の生態学 東北の山と森から. xx + 288 pp. ISBN 4-486-01574-6. 東海大学出版会, 東京. 価格 3150 円 (税込み).

本書は、森林生態学や、地形学、土壌学、地理学、砂防学、森林気象学、古生態学などの研究者が、環境要素としての積雪を中心にすえ、植物の生態を採った共同研究をまとめたものである。日本は世界でもまれに見る豪雪地帯にあって、積雪は日本の自然を性格づける重要な要素である。その観点から積雪に言及した生態学の論文、あるいは正面からこの問題を取り上げた論文も少なくないが、生態学として、雪の問題を体系的に扱った一冊の本というものはこれまで無かった。

本書は4部から構成され、第1部「雪山の自然環境と植生分布」では、地質や地形とともに気候の特徴を雪を中心にして述べ、積雪グライドや、クリープ、積雪沈降圧、雪崩など、降雪が地上に至って積雪となったあとの雪の挙動を詳しく解説し、さらに植生について、広域のおよび局所的にユニークな分布パターンを示すことや偽高山帯のような特異な植生の存在を解説している。この部分は、本書の主な舞台となる東北地方の自然の概要を、第2部以降の理解に直接かかわる事からとして解説したものであるが、とくに雪に関する解説には評者にとって目新しい内容が多く、ありがたかった。

第2部「雪山に生きる植物の生態」は、雪山の特異な環境の制約下で現に成長し、繁殖している植物たちの活動を、主に積雪環境とのかかわりから解きあかそうとした野外研究の紹介である。対象はマクロおよびミクロスケールの植生分布から雪山の植物の生活史特性まで、環境としては積雪の消長や、雪圧害、雪崩被害、凍結・融解現象、温度分布などが取り上げられ、個々の章があつかう課題は実に多

様である。第3部「雪山の環境変動と植生変遷」では“偽高山帯”の成立機構に関する議論が植生変遷史として整理されている。雪山の植生に関するこの議論はすでに半世紀にわたって魅力的に展開されてきたが、花粉分析をはじめとして植生史の多くの知見が議論をささえてきたことはいうまでもない。これらの議論のすじ道をたどる上で格好の総説になっており、日本植生史学会の会員諸氏にとって触発されるところが大きいものと思われる。そして、亜高山帯針葉樹林の分布は現在も流動的であることが花粉分析や雪田土壌の研究から紹介されている。

研究の多くは現在も進行中で、編者自身がまえがきで述べているように、十分に吟味されていない生データもかなり含まれている。各章の研究例はきわめて多岐にわたり、率直に言って、互いにすりあわせられた共同研究ならではの成果というものを見出しにくいのが、これは、おそらくこのことを反映しているであろう。それよりもむしろ、生きた研究の現場を読者に公開し、雪山に展開する多彩な生態学の問題に読者の関心を引き付けるところに本書のねらいはあったかと思う。そのために生じる混沌としたものも、長年雪の問題に関心をもってきた評者にはおもしろかった。第4部に進むと「雪山エコツアーへのいざない」となり、研究の最先端で議論を展開するここまでの姿勢から、一転、一般への啓蒙となる。これにはやや異質なものを感じなくもないが、上記のねらいの延長上に企画されたものであろう。読者によってはこの第4部から読みはじめるのもいいかもしれない。

(菊池多賀夫)